祝祭と零れ落ちたもの

臨床文藝医学会理事、内科医

職場が家から車で40分くらいかかるため、車の中で本を読むことが習慣化した。信号待ちで停車中に助手席に放り出した本を読み、青になるとまた放り出し走行中は本の内容のことなどを思い返している、あるいはあえて記憶を切断するためにラジオのボリュームを上げてただ聴いている。意外と捗るもので、最近ではスラヴォイ・ジジェク『イデオロギーの崇高な対象』、ジョルジョ・アガンベン『バートルビー—偶然性について』、奥野敦史『スウェーデンの精神科医療改革』、スラヴォイ・ジジェク『パンデミック　世界をゆるがした新型コロナウイルス』、大澤真幸/國分功一郎『コロナ時代の哲学』、バリー・ユアグロー『ボッティチェリ　疫病の時代の寓話』、大澤真幸『三島由紀夫ふたつの謎』、坂口恭平『苦しい時は電話して』などを車の中で読んでいた。

仕事をしていると、学生時代と違いどうしても落ち着いて本を読む時間がとれない。子供ができると家でも本を読む時間はない。子供は親に如何に本を読ませないようにするかが仕事といってもいいくらいで、朝 4 時などに起きて書斎に入ったとしても即座に気づいて寝室へ連れ戻される。寝室といっても、次女が生まれてからは 4 人では狭く、私はリビングに布団を敷いて寝ている。長女も私の隣に布団を敷くが、夜は大体寝室で寝ており朝方に私のほうに移動してくることが多い、だから朝早く起きて勉強や読書をしようとしても早晩長女の見回りの網にかかることになる。

私は効率化のことを考えている。どうすれば効率化を回避できるのか。目的に向かって最短で進むことしか頭にないかのような振る舞いから如何に自由になれるか。

カルロ・ロヴェッリの『時間は

存在しない』という本を読んだ。もちろん車の中で。子供と動物園で遊んだ帰りの本屋でたまたま見つけた本だった。著者は理論物理学者で「ループ量子重力理論」の提唱者の一人であるそうだ。著者によると時間は存在せず、世界は物ではなく出来事のネットワークである。事物は存在するものではなく、起きるものである。「この世界について考える際の最良の語法は、不変性を表す語法ではなく変化を表す語法、『～である』ではなく『～になる』という語法なのだ」。この世界は出来事、過程の集まりである、時間や事物があると思うのは私たちの視点がぼやけているからであると。ぼやけている私たちは痕跡を残す。痕跡のネットワークが記憶、過去をつくり、未来を予見させる。

効率化とはどういうことだろうか。無駄がない、ということか。それは誰にとって、なんの無駄がないのか。車であれば目的地へ最短の時間で着くこと、それは運転手にとって無駄がない。早く着くことで、残りの時間を有効に活用することができる。この人にとって残りの時間を有効に活用することは、それではなんだろうか。仕事をより多くこなすことだろうか、子供とより多く遊ぶことだろうか。仕事をより多くこなすことであるとすれば、それは誰が喜ぶのか。会社だろうか、社長だろうか、出世につながるということで当人にとってだろうか。子供とより多く遊ぶことであるとすれば、喜ぶのは子供だろうか。より多く遊べるから。ということは目的地への道中は子供にとってはなんであろうか。目的地は人を過去の中に置く。私はすでに予見した未来の中にいる。未来の私からみれば、今の私は絶えず遅れている、いつでも出遅れている。これは木村敏がうつ病の精神構造を説明する際に用いた post festum（祭りのあと、あとの祭り）という感覚とまさに一致する。そう考えると、効率化とは究極の目的の現在化のことではないか。最後の審判が現在であり、私たちは常にすでに過去の中にいてもがいている、焦慮に駆られている。目的達成のための行動は痕

跡のネットワークを極度に貧相なものにする。現在、過去、未来という時間の流れの意識そのものが post festum 的ということなのだろう。狩猟採集民的ではなく農耕社会的といってもいいだろうか。ロヴェッリの言い方を借りると、視点がぼやけていればいるほど、現在、過去、未来という時間意識が強くなる、post festum 的になる。これは現在の過去化といってもよいだろう。てんかんの精神構造とされる intra festum、祝祭の時間感覚においては究極的にぼやけがなくなる、視点がミクロになる、全てが現在化する。とすると統合失調症の精神構造とされる ante festum（前夜祭的時間感覚）では、現在が未来化することによりあらゆる事象が徴候化すると言えるだろう、そしてすべてが可能性のうちに留まり、その人は永遠の青年の様相を呈する。

効率化は可能性を閉ざす、過去のものとする、一方で徴候化は未来の可能性を開いたままにする。祝祭はすべてを体験する、ただそれは一時である。

変容への可能性はどこにあるのか。祝祭的とは悪く言えば刹那的とも言われる。私たちは大仰に言えば祝祭を経て、痕跡のネットワークを編成し直し、徴候化したものを現在化する、というプロセスを絶えず繰り返すことをやめないシステムを構築することを目指している、ともいえるかもしれない。

私は休日や仕事の後は、仕事関連の文献検索や読書はしないことにしている。小説家保坂和志の言うような「稼業としての読書」は仕事中にしか基本的にはしないと決めた。

より多くの本や文献を読むことを目指すとき、その人は最も効率化された方法を選択するだろう。しかしより多くを読む人はより多くを知っているかもしれないが、それだけのことでしかない。私はより少なく読み、より鈍臭く考える。人より仕事もできず、子育ても慣れたものではない。三つ編みは少し結ぶのが上手くなったと思っているが、子供からはまだダメ出しをされる。人よりも声が小さく、逡巡が多い、より多く間違え

る、どもる、口ごもる、言い淀む、黙る、酒にのまれることもままある、焦慮もつきものである。とても効率的な人間とは言えない。

私たちは目的には奉仕しない。ただ自分たちが楽しいと思える活動をする、その中で痕跡のネットワークを読み直し、新しいネットワークを組み込み、私たち自身が何者かへいつの間にか変容している、そのプロセスを繰り返している。それが何事かになるのか、ということではなくこのプロセス自体がすでに何事かであるということだ。目的のための活動ではなく、活動自体が何事かである。

私たちに奉仕すべき目的はない。人は目的の器ではない。目的は人を序列化する。

カルロ・ロヴェッリに戻る。「わたしたちはとくに、自分とは『別』の人間と呼ばれる生命体を構成する過程を集め、一つのまとまった像を作る。なぜならわたしたちの生活は社会的で、ほかのヒトと盛んに相互作用を行うからだ。彼らはわたしたちにとって、きわめて重要な原因と結果の結び目なのである。わたしたちは、自分と似た人々と相互作用することによって、『人間』という概念を形作ってきた。

思うに、己という概念はそこから生まれたのであって、内省から生まれたわけではない。『人』としての自分を考えるとき、わたしたちは仲間に当てはめるために自ら開発した精神的な回路を自分自身に適応しているのだ」

「自分自身を主題とする思考は、その人の一次的な経験ではなく、ほかのさまざまな考えにもとづいて行われる複雑で文化的な推論である。わたし自身にとっての最初の経験は—それに何か意味があるとして—自分の周囲の世界を見ることであって、自分自身を見ることではなかった。……わたしたちは、自分自身の同類から受け取った『己』という概念の反映なのである」

人は他者と意志の伝達がはかれる限りにおいてしか自分自身とも通じ合うことができない。それは他者と意志の伝達をはかるときと

同じ手段によってしか自らとも通じ合えないということである。

かれは、わたしがひとまず「他者」と呼ぶところのものを中継にして—自分自身に語りかけることを覚えたのだ。

自分と自分との間をとりもつもの、それは「他者」である。（ポール・ヴァレリー『カイエ』）

という詩人ヴァレリーの言葉を引用して、精神科医の中井久夫はそれを「私が自分と折り合いをつけられる尺度は私が他者と折り合いをつけられる、その程度である」と解釈している（中井久夫「感銘を受けた言葉」『アリアドネからの糸』）。

カルロ・ロヴェッリの言葉はヴァレリーの言葉とそのまま重なる。「時間は丸ごと現在にある。わたしたちの精神のなかに、記憶として、予想として存在する」が、その精神は出来事のネットワークの反映でしかない。

私たちの活動についても少し触れておく。当法人は事業として以下を掲げている。

(1) 地域住民の医療や健康等に関する疑問や相談に対する応答、対話
(2) 前提知識がなくても参加できる読書会、研究会、講演会等のイベント開催
(3) 書物等の翻訳作業や医療等に関する一般向けの記事の作成
(4) 学術、文化、芸術等に関する作品・論文等のレビュー
(5) 学校や塾とは異なる、子どもたちが学ぶための場の提供

(1)では、病院の外で医療者、患者という枠や肩書を超えて人として病いのことに限らず、人生における様々な悩みや問題について相談に乗り、対話を重ねていくことをしていきたいと考えている。これまで地域住民の健康相談に乗るという名目で健康カフェを商店街で実施した。訪問診療の手前のようなこともできればと思う。公園でパンや野菜を対価に医療をしたいというのはただの夢の話ではないと思っている。

(2)は、ラカン『不安』の読書会を定期的に開催している。会員によるレクチャーも不定期で開催している。作家などへの講演会の依

頼も検討している。

(3)は、ブログなどへの医療関係の記事の作成を考えている。自前でできる民間療法や代替医療、社会的処方などに関する有効性についてもどちらかといえば好意的な立場から検証していければと思っている。また、NPO 法人として翻訳権を取得し、洋書を翻訳出版することも検討している。

(4)は、 自主制作映画、音楽、写真集、詩集、お蔵入りとなっている修士論文、小説・断章等々、売れることを意図せず人知れず書かれ、制作された作品をドキュメントしブログ上に掲載している。年に 1 回、エントリー作品の中で特に面白いものがあれば臨床文藝医学賞を選出する（特典はない）。売れるかどうかにとらわれず、何かをつくり、考えることの本来の歓びを分かち合える場となればと考えている。

(5)は、寺子屋のようなものをイメージしているがまだ実現できていない。放課後に勉強したいという子供たちが集い、思い思いに学べるような半ばカフェのような場を作りたい。子供に限らず、誰でも出入りできるようなところがよい。また、ネット上に学校で習うような勉強関連の動画を up して無料で提供することも検討している、というよりやりたいと勝手に思っている。ただの学習動画ではなく、世界を自明のものとはしない立場から子供や学習者だけでなく動画を作成する側としても再学習できるようなものができればと想像している。できれば一方的に教えるのではなくディスカッションの時間も設けたい。

20 代の頃から考えていることは結局今もその根幹は変わらないように思う。記憶の澱を、残滓をかき集めること、残響に耳を澄ますこと、別種の生を紡ぎ出すこと、祝祭のあとを絶えず、生き直すこと。

「そのとおり。もはやわれわれには引用しか残されていません。言語は引用のシステムなのです」

「二千冊も読める者はいません。私は四百年生きているが、十五冊を越えることができなかった。そ

れに、ただ読むだけでなく、くり返し読むことが大切なのです」
（ボルヘス「疲れた男のユートピア」『パラケルススの薔薇』）

……考えるということは、さまざまな相違を忘れること、一般化すること、抽象化することである。フネスのいわばすし詰めの世界には、およそ直截的な細部しか存在しなかった。
（ボルヘス「記憶の人、フネス」『伝奇集』）

　零れ落ちたものを掬い上げるために、私たちは祝祭を繰り返すのだろう。
(2021/03/28)